
電話の向こう

飯野こゆみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

電話の向こう

【著者】

Z2664E

【作者名】

飯野こじゅみ

【あらすじ】

結婚11年。子供はないが夫と二人それなりに幸せだった。ある日1本の電話が私の幸せを奪つていった。電話の音が鳴るとあの日のことを思い出してしまいそうで、私は電話線を引き抜いた。

(前書き)

話の中に振り込め詐欺が出てきます。許される事ではないと思います。作者は決して振り込め詐欺を容認する訳ではないと、「理解いただけだと思います。」

5ヶ月と6日私は電話の音を聞いていない。

あの日、あの電話を受けた日から。

結婚して11年。子供はいなかつたが、それなりに夫婦仲良く暮らしていた。

凄く幸せとも思つていなかつたけれど、不幸とは思つたこともない。ケンカもしたことはあつたけれど長引いたことは一度だつてなかつた。

私の一方的な我儘だつて彼は許してくれていたのだ。

休みの日は買い物に出掛けたり、映画を観たり、長期の休みには必ず旅行に出かけていた。

友人達も結婚していたが、殆どの家庭には子供がいて、初めはお祝いに行つたり遊びにいったりの付き合いもあつたが、私達に子供がない事は、本人達よりも周りの友人達の方が気にしていたらしく、結婚して5年を過ぎた辺りからどちらともなく連絡が途絶えていた。専業主婦の私は、毎日掃除をし、洗濯をし、料理を作る。その繰り返し。

今思えば、一心に夫のことを待つっていたのかも知れない。そう、自分で思うより夫を愛していたのだと。

いつも夫は帰るゴールをしてくれた。

「もしもしし、俺。これから帰るよ。夕飯はなんかい？」

必ず「もしもしし、俺」こんな風に話し出す。

あの日もそうだった。

「もしもし、俺。これから帰るよ。今日の風は凄いって。早く家に
帰りたい。お前が作った料理で暖まりたいよ」
夫はそういった。でもその電話になんと返したかは全く記憶がない。
本当なら30分程で帰つてくるのに、その日夫はいつまで待つても
帰つて来なかつたのだ。

そして、不意に電話が鳴つた。

「もしもし、今井さんのお宅ですか？」
私が最後にとつた電話は、警察からだつた。

それからの私はどうしたのか、全く記憶がないのだ。
気がついたら、病院にいた。
自分で電話したのかさえ解らないが、義父、義母がいて、自分の両
親がいて。

そしてそこに、もう一度と動かない夫がいた。

交通事故だつた。その後は義父が手続きをしてくれたと母親から聞
いた。

その後のお通夜もお葬式も放心状態の私が喪主を務められるわけも
なく、喪服を着て人形のように座つていたらしい。

自分の意識がはつきりしてきたのは全てを終え自宅の玄関へ戻つて
来た時だつたと思う。

自宅に帰つてまず始めた事、電話のコードを抜いたことだつた。

誰の声も聞きたくなかった。

電話から聞こえるあの優しい声はもう聞けないのだから。

誰にも逢いたくない。

私が逢いたいのは夫、只一人だから。

我僕で甘えん坊。30過ぎた女にどうかと思つが、これは夫の口癖だ。

本当、その通りだつた。

彼がいないのに、何事もなかつたかのように、そこに日常があることが不思議でならなかつた。

役所関係にも郵便局にも手続きをしたのに、ポストには未だに夫宛の郵便物が届く。

メール便だつた。

以前は考えた事もなかつた、このメール便が私を苦しめる。読む主のいないこのメール便が。

私を心配し、始めの頃こそ2日置きに着てくれた母がポストの中身も処分してくれていたが、ひと月経つとそうもいかない。

止める手段の解らない私は夫宛の郵便物をみながら、枯れる事のしらない涙を流した。

十一年間一緒に暮らしたこの部屋には何処を見渡しても夫を思い起にさせるものばかり、ソファもテーブルも食器戸棚もテレビだつて一人で見て買つた物。

休みの日、ゆっくり起きだして座つていたソファ。

いつも左端に座つて足を組んで。左手に新聞を持って、掃除機をかける私に邪険されて仕方なく足を上げる夫。右側は私がいつでも座れるように空けてくれていたのよね。

食事をするテーブル、夫が座る椅子、夫婦茶碗やそろいの箸。

皆ここに在るといつのに。

目を瞑れば直ぐ其処に貴方が見えるのに。

この家にある夫の物は何一つ動かしていない。

義父母が憔悴しきつた私を心配してくれたのだろう、夫の物をひきとろうか？ と言つてくれたが私は首を振つた。

夫の物がこの家から無くなつてしまつと、夫の存在そのものが無かつたように思えて怖かつたから。

何度も日が昇り、また落ちていつても私の悲しみは減ることは無かつた。

書斎の机の上にある書きかけのメモ。癖のあるその字をみながらまた涙する。

自分でも驚いたのはニュースだつた。何ヶ月もたつた今でさえ、名も知らぬ誰かが交通事故で亡くなつたというのを聞くと涙が零れるのだ。

この一瞬さえなかつたら、この人もあの人もみんな明日があつたのにと。

そんな毎日を送つていたある日、電力会社の人が電気の点検にやってきた。

ここ最近母親以外の人が家に入つた事は無かつた。部屋の奥にあるブレーカーの点検を終えた後、その人は帰つていつたのだが。

その数分後に電話が鳴つた。

点検をした彼が親切にも外れている電話線を繋いでいつたのだ。

久し振りに聞く電話の音に恐怖が蘇えつて身体が震えた。その場で

しゃがみこみ耳を塞ぐ。

でも、どうじたつて電話の音は耳に入つてしまつ。

早く、早く鳴り終えて。私の悲痛な願いも虚しく鳴り続ける電話。もう限界だ、そう思い電話線に手を伸ばしかけたその時に「ホールが止み、留守番電話に切り返つた。電話の向こうから聞えてきたのは男の声だった。

「もしもしし、俺。いないの？もしもしー」

それは私が留守の時に入れる彼の言葉と同じだった。夫とは違う若い男の声だったが、良く聞いていたそのフレーズに、恐る恐る震える手を持ち上げて、私は受話器をあげていた。恐怖と緊張で焼けついた喉、耳にあてた受話器の向こうからは、何度も”もしもしし”と声が繰り返されていた。

「もしもしし」

やつとの思いで声を出した。

「もしもしし、俺だよ。良かつた、いないかと思つたよ」

電話の男はやうにつた。

「もしもしし、裕之さんなの？」

ありつこないつて思つけど、すがる思いで名前をだした。

「やうだよ、裕之だよ。大変なんだ、俺事故起しちやつて

男はそつ言つとこきなり泣きはじめた。

何かを告げているようだが、もつしゃくりあげていて何を言つていいのかさえわからない。

でも、その泣き声を聞いて私も一緒に泣き始めてしまつた。

私の泣き声に困惑したのか急に男のしゃくり声が小さくなつた。

「切らないで、切らないで少し私と話をして、お願ひだから……裕えさん」

私の方が泣きすがつてしまつた。受話器の向こうは本当に困惑しているのが良く解つた。

もう一度

「お願ひ、切らないで。私と話をして欲しい。うううん、話をしなくてもいい、聞いてくれるだけでいいの、お願ひ」するといつの間に泣き止んだ受話器の向こうから

「大丈夫、聞くから話してみて」優しい声がした。

「ありがとう、ありがとう」

何から話したらいいのか解らなかつたが、あの夜、最後に電話をもらつた日から、電話が怖くなり電話線を抜いていたこと。そして夫に対する私の思いをゆっくりと話だした。

途中、”うん、うん”と相槌を打ちながら彼は口を挟むことなく、私の話を聞いてくれた。

最後に私は、夫に今まで一緒にいてくれてという意味と話を聞いてくれた彼に対して心を込めて

「ありがとう」

と言い、話終えた。

電話の向こうではさつきのしゃくりあげたような声でなく、静かにすすり泣く声。

そして、彼が静かに話を始めた。

「本当に、申し訳ないと思つていい。許される事じゃないと思つていい」と彼は私に告白した。

「もう気がついていいと思つたけど、俺は、あんたが言った名前を言ひ。世に言つ振り込め詐欺をしようとしたんだ。俺、俺、今まで何をやっても上手くいかなくて、バイト初めても直ぐに嫌になつて長続きしないし、先輩に誘われてこんな事に首を突つ込んでしまつた。人を好きになつたり、誰かを失つたこともないから、正直俺にはあんたの気持ちは解らないけど。これはやつちやいけないことだつていうのはわかつたよ。この電話を最後にもうやらねえ。ねえ、あんた、またこの電話線切つちゃうのか？」

彼が私に問いかけた。

「多分、やつしよつと思つ

多分じゃない。きっと私はこの電話を切つた後、電話線を外すだろう。

「お願いがあるんだ。俺、これから今までの事反省して罪を償つてこようと思つ。その後、出来る事なら普通に働きたいと思う。だから、その時報告させてもらえないか？ 一年先かもしれない、二年先になるかもしれない、だけどそれまでこの電話線繋いでおいて貰えないだらうか？」

今度は私が戸惑う。きっと彼の言葉には応えられない。いつまでここにいられるかもわからないのだから。

「『めん、約束できない』
正直に告げた私に

「そつか、じゃあ、違う約束してくれないかな？」

と彼は言った。

「違う約束?」

私が問うと

「死なないで」

死なないでと彼が言った。その言葉はきっと誰もが私に言いたかった言葉だと思う。親でさえ口にしなかったその言葉。きっと言つてしまつたら現実にしてしまいそうに思ったのかも知れない。顔も知らない、彼だから言えた言葉だだう。

実際、私はそのつもりだった。私にはお葬式の記憶が一切ない。だから一周忌できちんと彼を見送り、一度お別れをして、私も彼の元へ旅立とうと決めていたのだから。

もう一度受話器から

「お願ひ、死なないで」と声がした。

「わからないよ。あなたと話せてよかつたとは思う。でもこの先私どうしたらいいのか。その人がいないここにいても意味がないの!」自分でも驚く程の大きな声で泣き叫ぶ私がいた。

「意味はあつたよ、少なくとも俺は人生を変えるきっかけをもつた

たと思う。俺、あんたが電話にでなかつたら、今頃、また違う人に電話をかけて、明日も明後日もその次の日もずっと、ずっとこんな生活してかもしないから、あんたは俺にとつて人生の恩人なのかもしけない。でもあんたがいなくなつてしまつたら、俺きっとつきとあんたと同じように悲しむと思う。今日話したばっかりで、会つた事もないけど、俺はあんたに報告がしたいんだ。立ち直つたよ。頑張つてるよつて

彼の声も最後の方は泣き声だつた。

それから暫く無言が続いた。そして

「もう携帯の電池がないんだ。お願ひだ。返事を聞かせて欲しい」まだ彼は泣いているようだつた。私は意を決した。

「解つたわ、あなたが立ち直つて電話が鳴るまでは待つてるから。早く連絡頂戴ね」

そこまでいふと電話が切れた。

私の声は聞こえただろうか？

こんな最悪な状態の私が彼を救えるのだろうか？

私が……

疑問が渦巻く。でも信じてみようと思つた。

”死なないで”と言つてくれた彼を。

正直、明日はまた落ち込んで夫を思つて泣くかもしれない。でも今は彼に

私も頑張つてるよ。

と號したー、かう思つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2664e/>

電話の向こう

2010年10月15日21時19分発行